

■押川春浪 **小説家**。処女作『**海底軍艦**』で、少年冒険小説のジャンルを開拓し、多くの後進の育成に尽力。 野球文化も創った。おしかわしゅんろう

三つの内乱・1876＝ 愛媛県松山市生で伝道活動を行っていた、キリスト教牧師で東北学院の創立者押川方義の子に生まれる。本名は方存(まさあり)。生後8か月で、新潟で伝道を行っていた父に母とともに呼び寄せられる。

大久保暗殺・1878＝ 2歳：新潟大火、

沖縄県編入・1879＝ 3歳：再び新潟大火が起こり、

・・・・・・1880＝ 4歳：父方義が伝道地を仙台に移し、両親とともに転居、

明治14年政変1881＝ 5歳：弟清が誕生。

岩倉具視没・1883＝ 7歳：宮城師範学校付属小学校入学。

内閣発足・・1885＝ **9歳**：

帝国憲法発布1889＝13歳：卒業すると、単身上京し、明治学院2年級に入学。

野球に熱中し、2年続けて落第、仙台に呼び戻され、父の設立した東北学院に編入。ここで乱暴を働き放校処分となり札幌農学校に入るが、ここでも騒ぎを起こして、

日清戦争始・1894＝**18歳**：芝の水産講習所(現東京海洋大学)入学。この頃一時岩野泡鳴宅に寄宿する。しかしここも退学し、

日清戦争終・1895＝19歳：父方義が親しかった大隈重信の創立した東京専門学校専修英語科入学、ここでは正宗白鳥と親しくした。英語学部卒業後に政学部邦語政治科入学、野球部を創設するが早々に消滅、

子規句歌革新1898＝22歳：〈空が真つ暗になるほどの雀の大合戦があり落ちてきた雀を皆が焼き鳥にして食べた記事(高知日日新聞)、自分でも見て信じることができた〉

この間、「水滸伝」「三国志」を愛読し、{少年文庫}誌にも投稿するうち、小説を志し、『**海底軍艦**』を執筆。海軍少将肝付兼行らの助言で、連縁にあたる桜井鳴村の紹介により、**巖谷小波**に認められ、支援を得て、

ピノ/国産化・1900＝24歳：在学中に*『**海島冒険奇譚 海底軍艦**』を文武社から出版するや大評判となり一気に名声を得、小波の主催する文学サークル木曜会にも参加し、永井荷風ら小説家たちとも親交を得る。また小波からは後に“**春波**”の号を与えられ、これを自ら“**春浪**”に改めた。

田中正造直訴1901＝25歳：東京専門学校卒業。母の療養のために鎌倉に移り、翌年鎌倉に越して来た国木田独歩とも親しくした。同年東京に戻り、牛込で一家で同居。『**海底軍艦**』の再版が出るとともに、生田葵山の紹介で、大学館から『航海奇譚』を出版。続いて、『世界漫遊 奇人の旅行』を皮切りに、翌年にかけて『世界怪奇譚』シリーズ全六編を出版。このうち、『空中大飛行艇』は、ヴェルヌ「気球に乗って五週間」、レモンド「空中飛行」、エドワード・ダグラス・フォーセツト「空中軍艦」に影響を受け、前年にツェッペリン伯爵の硬式飛行船が建造されるなど、各国の飛行船健造熱が反映されている。

教科書疑獄・1902＝26歳：以後、海底軍艦シリーズとして、『英雄小説 武俠の日本』、

日比谷公園・1903＝**27歳**：〈大彗星出現の記事(大阪毎夕新報)みずからの人生を考えた>結婚して浅草寺近くに居を構え、一時千葉の館山にも住んだが、後に転々と転居を繰り返す。『千年後の世界』『銀山王 伝奇小説』『新アラビヤナイト』、アレクサンドル・デュマ「黒いチューリップ」を訳述した「ヘーグ奇怪塔」。この頃から過度の飲酒により、徐々に体調を崩すようになる。

日露戦争始・1904＝28歳：〈{中学世界}に紹介された30年前のジブラルタル・ガゼット新聞のマリーセレスト号事件の記事>「立身膝栗毛」。「海国冒険奇譚 新造軍艦」「戦時英雄小説 武俠艦隊」。『博文館が雑誌『日露戦争写真画報』を発刊、巖谷小波の推薦で編集者として入社、編集作業のかたわら同誌に小説や時評を執筆する。

日露戦争終・1905＝29歳：この頃科学小説の種にと20年前の真名駿二という人が自費出版した「千万無量諸星世界旅行」から抜き書きした三条>「世界冒険少年譚」、

満鉄発足・・1906＝30歳：この頃「空中大飛行艇」が講師の真龍斎貞水によって語られ、その速記録も「空中奇譚」と題して同誌に掲載されている。「怪雲奇星 冒険小説」「英雄小説 新日本島」と、次々と冒険小説を発表する。同誌が『写真画報』に変わると、主筆に拔擢され、ここでも小説を掲載した。

韓国反日暴動1907＝31歳：〈大黒座で帝国演芸団がオーケストラから曲馬、魔術までやり好評と言う記事(山報新聞)>「絶島軍鑑 冒険奇譚」「幽霊旅館 冒険怪談」「東洋武俠団 英雄小説」、海底軍艦シリーズの最後となる「英雄小説 東洋武俠団」を出版。この間、『少年世界』、『中学世界』にも新作を連載し、『地底の王冠』『南極の怪事』『新日本島』などの多くの作品を書き、富国強兵の時流に乗って、青少年の熱烈な支持を受ける。

アヲテ創刊・1908＝32歳：「万国幽霊怪話」「海島奇俠 海軍冒険小説」。*『写真画報』は廃刊、引き続き発刊された『冒険世界』の主筆となり、自作を始め、他の多くの作家も冒険小説を執筆し、冒険小説ブームとも言える時代を作り出した。元々の野球好きに加えて、弟の清が早稲田大学野球部キャプテンを務めたことで野球界の人脈にも通じ、野球を中心に、{冒険世界}誌上、{運動世界}などのスポーツ誌にも寄稿して、_スポーツ振興に尽力。スポーツのための総合グラウンドの必要性にも着目し、当時京浜電鉄にいた中沢臨川とともに、

伊藤博文暗殺1909＝33歳：〈酸素が少なくなっていくなか将来の人間はどんな形になるかと言う記事(科学之友)>「北極飛行船 冒険小説」。東京運動記者倶楽部の結成に参加し、吉岡信敬、橋戸信、飛田徳洲らと_スポーツ社交団体(天狗倶楽部)を結成し、羽田運動場を開設。さらに中川らと司法大臣尾崎行雄を会長とする『日本運動倶楽部』を設立、様々な競技会を開催した。

韓国併合・・1910＝34歳：〈XYZ生訳「恐怖之制御」(横浜日日新聞)>〈マルコーニの無線電信の技術を地球と他の惑星の間での通信に応用できれば懸賞金という記事(科学之友)>〈満月の夜の虹の記事(熊谷毎夕報新報)>

大逆事件判決1911＝35歳：〈金龍館で小山松聲弁士のZ団首領ジゴマの話聞いたメモ>大日本体育協会と共催でストックホルムオリンピックの予選大会を開催し、日本初のオリンピック選手を送り出した。_東京朝日新聞で「野球害毒論」が起これと、読売新聞紙上で反論を掲載。演説会を聞くなど激しく反発するが、『冒険世界』誌上での反論掲載を巡って博文館上層部と対立し、同誌を辞任、退社する。

明治天皇没・1912＝**36歳**：〈アメリカで「破れた足鎧」という東洋劇が発売され大評判という記事(活動と演劇誌)>「人形の奇遇 少年少女冒険小説」「大復讐 英雄小説」。博文館退社早々、_興文社で『武俠世界』を発刊し主筆となる。『冒険世界』の平塚断水や挿絵担当の小杉未醒も同誌に移り、自らの小説や評論など同様の内容に加えて、スポーツ記事や、政治論、偉人の伝記などにも力を入れ、好調な売れ行きを示す。また同誌で早稲田大学周辺の淫売窟退治運動も掲げて、警察や大学による対策を引き出した。かつて野球害毒論の論争相手で、一高学長の新渡戸稲造に対して、『実業之世界』誌の野依秀一が攻撃した際に春浪名義の記事が書かれたが、これには一高始め大きな非難を浴び、読売新聞に謝罪記事を掲載した。

大正政変・・1913＝37歳：〈ホシナ大探偵 陰奇探偵小説。この頃には、飲酒による体調悪化で執筆もしばしば中断し、

第一次大戦始1914＝38歳：〈天空に三つの太陽が見えた幻日の記事(房州毎日新報)、自分も見た>_小笠原父島に転地療養。同年後藤矢峯との共著「怪傑大隈重信」「カイゼル艦隊」「蛮勇軍団」などが出版されるが、まったく関与していない「海上の秘密」が、私印を偽造して中央書院から出版され、交渉・談判を弁護士に依頼するも版權が転売されて刊行された。『武俠世界』には第一次世界大戦など戦争や、天狗倶楽部関係の記事が増え、天狗倶楽部機関誌の広告も掲載された。脳膜炎により田端の自宅で没した。

神田青年会館で春浪追悼演説会が開かれ、翌年の{武俠世界}2月号は春浪追悼文集となった。フィリピン

の独立運動にも共感を寄せており、{海底軍艦}シリーズには革命家エミリオ・アギナルドも登場、1942年(昭和17年)に木村毅が報道班員としてフィリピンを訪れた際にシリーズ6冊を携えてアギナルド本人に手渡ししている。6年後、弟押川清は日本最初の職業野球チーム{日本運動協会}の結成に関わり、日本のプロ野球創始者となった。